

障害を持つ子どもたちの心の世界を捉え共感する

特定非営利活動法人発達保障研究センター 品川 文雄

こんにちは。紹介を受けました品川です。今日（2011年4月16日）ここへ来ようかと思っている矢先に地震がありました。この間、皆さんは若いからそんなことはないかもしれませんが、何かいつもふらふら、自分の目まいか地震か分からないような状態が続いています。年を取るとあるんです。余震が起こったなと思い、電車が止まりそうだというのでちょっと早めに来たんです。今日皆さんにお渡ししたプリントから入ろうと思ったのですが、今日は地震の話をまずさせてもらいます。

（1）3・11 大震災のなかの障害者の困難

先週の金曜日と土曜日、私は岩手、宮城、福島など被災地を訪問してきました。阪神淡路大震災でも障害のある人や高齢者、子どもなどに対して「災害弱者」という言葉が使われていたと思いますが、今もそのことを感じました。障害のある人たち、高齢の人たちが災害で最も困難な状態に陥っているのです。

自主避難が呼び掛けられていた南相馬の障害のある方から日本障害者協議会に電話がかかってきました。「助けてくれ。市役所に連絡しても迎えに来てくれないんだ。もう食料も尽きている。旗を上げて自分の存在を知らせているけれど、来てくれない。来てくれたと思ったら、障害のあるやつなんて構ってられないと言われた」と、おっしゃっていました。

また、自閉性障害の子どもたちは避難所に

入ろうといっても、避難所のあのわんわん大きな音があふれた、そしてプライバシーのない状態の中では暮らしていけない。精神障害の方も同じです。ある子は、その家は車が無事だったので、夜などは車で生活せざるを得ない。たとえ避難所に入っても、もともとあった偏食が更にひどくなって、ものが食べられない状態が生じている。余震などがあるとパニックになって大変な状況だということも、お母さんは言っていました。

てんかんの病気を持っている方たちは、薬を飲んでほとんどの場合は発作が抑えられているのですが、被災して、薬が手元になくなってしまった。それで全国に薬はないかとメールなどが飛び交いました。糖尿病の方も同じです。自分が行っていた病院がなくなったので、透析ができない。透析ができなければ、生き死にという問題になってきます。それ以外の障害の方たちも、あの被災地で、ただでさえ困難なのに更に障害があることによって困難が増していました。そうした人たちがたくさんいることを私は訪問し感じました。

仙台のある通園施設の園長さんから聞いた話ですが、通園施設を卒園し、成人したアスペルガーの青年がいたそうです。その方は苦勞しながら専門学校を卒業し、特別養護老人ホームの職員になり、やっと夜勤もできるようになりました。夜勤ができるということは、ある意味で一人前になったということで、これからだと思っていたところ、この大地震と津波で彼は亡くなりました。

津波が来るぞと通報された時に、「てんでに

逃げろ」という「津波てんでんこ」という言葉がありますが、もう周りのこと、他人のことなどは構わずにまず逃げろというのが命をつなぐ1つの方法だと言われています。しかし、そのアスペルガーの青年は、養護老人ホームにいたおじいさん、おばあさんを見捨てられなかった。結果としては、おじいさん、おばあさんと一緒に亡くなられたのです。

確かに津波が来て、てんでんに逃げて、命を長らえるのは大事です。しかし、彼のようにおじいさん、おばあさんを助けようと思って努力し、亡くなられた。本当にてんでんこで逃げていいのか。てんでんこで逃げるとなれば誰かを見捨てなければいけないのです。もう目の前に波が迫ってから、車椅子の方やおじいさん、うちでも80歳過ぎた母親がいますが、母親を置いていっていいのか。自分は命が助かるかもしれない。命が助かることによって、また次につながるかもしれないけれど、そういう社会のあり方でいいのかと思います。

そのことは私自身は答えが見つかっていないのです。命を長らえる、てんでんこに逃げるとするのは大事なことだと思うけれども、

権 利

母さんは あたしを
ひもでつないで
働きにいくのです
どの施設も、入れてくれない
重度障害児のあたしが
もっている“権利”はただ
“義務教育”の免除だけです

もう1つ、「学校に行きたい」。

学校に行きたい 春

みんながうきうきする春が もうすぐやってくる

入学式 一年生

みんな晴れがましい顔

でも

弘子ちゃんのママは また頭から ふとんをかぶって泣くのかな
ことして三回目 入学式の日はいつもそうなの

見捨てられる人が現にいるかもしれない。そういう中で、私たちみんなが共に生き、共に命を長らえるとはどういうことなのかについて、皆さんもぜひ一緒に考えてもらいたいと思って最初にお話ししました。「共生社会」、共に生きる社会、障害のある人も高齢の方も本当に共に生きる社会がどうあるべきなのかが突き付けられています。もっと高い次元の思想、考えが必要なのではないか。そして福祉の状況を進展させることが必要なのではないかと感じた2日間でした。

(2) 養護学校義務化への道

私は37年間、小学校の障害児学級、今でいう特別支援学級の担当をしていました。2年前に退職して、今はNPO法人の理事長をしています。障害児学級で出会った子どもたちのことをエピソード風にお話しして問題提起をしていきたいと思います。

まず、始めに2つの詩を読みます。

1つ目は「権利」。

信君は もう大きいけれど 歩けないから
ママがおんぶ ママがつぶれそう
学校に行きたくても
口もきけないし 歩けないから 入れてくれない
身障児の学校はあるけれど
とつても遠くて通えないんだ
すぐ熱が出るもん
そして手足がすごーく痛いんだ

かおるちゃんは 真赤なランドセルを買ってもらった
学校へ行くとはりきっていたけれど
やっぱり三年猶予して そのまま行けなかった

いまはもういないけど ママは
真赤なかおるちゃんのランドセルを机において
かわいい笑顔を思い出している

また入学式が近づいた
今年は頭からふとんをかぶって
泣くママが何人いるのかな

この詩にあるように 30 数年前、わが国では多くの障害児が学校に入れませんでした。学校に行けないどころか、行けないことによって死亡率が高まっていたと言われてます。私たちはそのことを、「学校に入るな」ということは、生きるなということではないか」と言い、この事実を告発しました。

更に、新聞に掲載された障害児と家族の悲劇的事件をまとめると、次のような傾向があると言われてます。3 つのピークがあります。1 つは誕生時、もう 1 つは学校入学時、3 つ目は社会に巣立つ頃、悲劇的事件が起こると言われています。

どの時期も多くの場合は、おめでとう、誕生おめでとう、入学おめでとうと言われる時期です。しかし、障害のあることで、産まれた時おめでとうと祝福されなかつたり、入学が保障されなかつたり、社会に出ようと思っても働く場がなかつたのです。世間が明るければ明るいほど、それが保障されない自分の周りは漆黒のような闇がある。それによって悲劇的事件が起こると言われています。

なぜ、そのような状態が生まれるかという、いろいろな要因があります。1 つは、当時障害のある子たちは学校に行けなかった、学校から排除されていたという事実です。時の文部省は通達の中で、彼ら障害のある子たちを「教育に耐えることのできないもの」として就学猶予または就学免除をさせていたのです。就学猶予というのは、何年かたったらおいでということ。しかし、当時文部省は、何年かたったら免除に切り替えなさい、学校に行かなくていいよというようにしていました。

それに対して、1960 年代後半からうちの子は障害があっても必ず伸びるということで、障害児を育てる親たちを中心に「学校に行きたい、友達が欲しい、どの子にも入学おめでとうを」という教育権、教育を保障することを求める運動が日本全国で練り広げられました。その運動の結果、1979 年に養護学校が義務化され、どんなに障害の重い子どもでも学校に入れるようになったのです。今から 30 数年前です。それまでは、多くの障害のある子

たちは学校に入れなかった。それによって命も削られ、自ら命を絶つ人がたくさんいたという事実があったということです。

学校に行くことが当たり前だと考えていると思いますが、当たり前ではない時代が障害のある子たちはあったという事実を知っていただきたいと思います。

(3) シゲノリ君のこと

私は 1972 (昭和 47) 年、教員になりました。それからたくさん子どもたちと出会いました。障害のある子たちはどの子ども教育に耐えられる。耐えることができない子はいない。どの子ども成長、発達する子なのだというのを、私は事実で確かめてきました。

シゲノリ君もその 1 人です。シゲノリ君は自閉症の子です。入学式が終わって教室に入ってきて彼は何をしたかという、教室の黒板に 100 を書きました。100 が書けるんだと私は思った。すると黒板消しで 100 を消し、99 を書きました。99 も書けるんだと思った。また消して 98、97、……、ついに 0 まで書きました。ずっと 100 から 0 まで書いて、また 100 に戻って書いて。彼にとってこの数字は、皆さんがイメージする数字とは違う、単なる記号でしかなかったんですね。話し言葉のないお子さんでした。自分の気持ちが伝えられない。それで、何とか話し言葉を獲得できないかと思ったんですね。

もう 6 歳です。私はどうしたか、何を考えたか。本当に恥ずかしい話ですが、話す時は息を出しますよね、本当にまじめに考えたのですが、もしかすると意図的に息を出す出し方が分からないのではないかと考えたのです。これは自分の失敗談として語りますが、ローソクをいっぱい買ってきて、ローソクの炎を消す活動をしました。息を吹けば炎は消える、意図して息を出すことを何度もやったのです。すると彼は意識し過ぎて、私がローソクをつ

けると、息を吸うようになってしまいました。失敗でした。

そんなこともあって、こんなことをやっていてもだめだなと思いました。その子に、人と話すこと、人に自分の思いを伝えること、人の思いが分かること、それをどれだけ伝えられるだろうかと、いろいろ考えて取り組みました。例えば、お散歩で八百屋さんに行き、「じゃあ今日はりんごを買ってこようか」と買ってきて「これはりんごだね、りんごおいしいね」と、教室で「りんご」と言いながらみんなで食べる。柿がなっていたら「柿だね」と言って一緒に取って食べるとか、具体物、文字、意味をつなげられれば、その子は何とかなるのではないかと思って、そういう取り組みをたくさんしました。いろいろな物の絵カード取りをしたり、「きゅうりの歌」など野菜に関係する歌を歌いながら、実際にカードを見せて、「これはきゅうりだよ」と示したりしました。

『おくちはどこ』という絵本で、「さっちゃん、さっちゃん、おくちはどこ。どこでしょうね」と、これは口だね、お耳、お目々というようにしながら、身体部位とカードと言葉と文字をつなげようと努力しました。

すると、3 年生ぐらいになって『ノンタン』の絵本を読んでいたら、ノンタンが「しー」と言う場面があったのですが、彼も「しー」と言ったのです。それから「赤いりんご」でも、「あお」という言葉を発声したりしました。

そして忘れもしません、4 年生になって初めて意味のある言葉を言ったのです。それは何かというと「えっえっ」でした。散歩に行こうとした時に彼は私に向かって「えっえっ」と言ったのです。それはどんな意味か、皆さんは分かるわけありませんよね。私は分かったんです。スーパーに入ってエスカレーターに乗って、てっぺんまで行ってまた降りてくる。それが散歩のコースだったんです。彼はエスカレーターが気に入っていたようで、「え

っえっ」というのはエスカレーターではないかと私は思って、散歩のコースで「ほら、シゲノリ君、エスカレーターだよ。君言っていたよね」というような話をしながらやっていたら、まさにその通りだったんです。でも、最初は半信半疑でしたが、次の時も「えっえっ」。そして実現すると、うれしくて「えっえっ」と言う。

私の尊敬する江口季好先生が、障害のある子たちの言葉は『源氏物語』を読むより理解するのが難しいと言っていました。「えっえっ」でエスカレーターに乗りたいということを理解しなければいけないのですから。彼らと生活していたので、彼が何を思っているのかが分かりました。「えっえっ」ということで自分の気持ちが相手に伝わってそれが実現する。その喜びが重なって、徐々に彼は言葉を発するようになっていきました。

5年生の後半、夏休みが近くなるとプールに入ります。ほかのクラスの子たちがプールに行くところを彼は見ました。すると彼は「プール、ゲタ、シャワー」と言いました。「プールに行きたい。ゲタ（ビーチサンダル）をはいてプールに行きたい。シャワーを浴びてプールに入りたい」ということを「プール、ゲタ、シャワー」で表現しました。

家では「イトーヨーカ堂に行きたい」をお父さんに「イトーヨーカドー、オカネ、クルマ、ボウシ」。ボウシはお父さんがお出掛けする時に帽子をかぶるからそう言ったのです。

その頃になって、お母さんがしみじみと私に言いました。この子は小さい頃から本当にかわいかったけど、今、もっとかわいくなった。彼が思っていることが私に伝わる。そして私がそれをかなえてあげたり、かなえてあげないことの中で、いろいろなやりとりができる。本当にシゲノリがいとおしく感じられるようになったと。

私は教員になって10年たち、本当に教師でいいのだろうか、辞めようと思ったんです。

うちの母ちゃんに「辞めたいんだけど」と言うのと「だめ」と言われたので辞めなかったのですが、それで、生き直して、子どもたちと一緒に学べる教師になろうということを取り組んだ子どもの1人でした。

話し言葉は3歳過ぎて出なかったら、なかなか出ません。まして、小学校になってから話し言葉が出せることなどない、一般的にはそう言われていました。でも、彼は4年生になってお話しができるようになった。私はとてもうれしく思いました。いろいろな働きかけを周りの大人があきらめずに取り組めば、伸びないと言われ、教育に耐えることができないと言われている子どもたちでも、やはり花を開かせることができる。このことをお伝えしたかったのです。

(4) 障害を持つ子どもの心に寄り添う

37年間教師生活をしていて失敗ばかりだったと私は反省しています。成長させられなかったなあ、そういう思いを持って卒業させた子どももいました。その1人が、ユウイチ君という子です。この子も自閉性障害と知的障害のある子でした。

言葉がなくて指示が通らなくて、私が準備した教材にも興味を示さない。隙があったら教室から逃げ出す。あ、いなくなったと思って、捜しにいったらお家に帰っていたということもありました。

ユウイチ君に有効な手立てを打てないまま、卒業させてしまいました。ユウイチ君は特別支援学校の高等部を卒業して共同作業所に入りました。私が見学に行くと、相変わらずうろろろしていたのですが、彼は何をしたかという、ミキサーのスイッチを入れたり止めたりするようになっていました。ミキサーは何かというと、牛乳パックを溶いて紙すきして、紙のはがきを作る工程の1つです。

彼はミキサーのスイッチを入れたり止めたりしていたんです。そこの指導員さんは私に向かって何と言ったかという。「ミキサーの動く音を聞くとね、ユウイチが仕事に参加していると思うんです」とおっしゃったんです。私は指導員さんの言葉を聞いて自分を恥じました。何もできない、自分が用意した教材にまったくのってくれない、本当にしょうがないユウイチだと、言葉では決して出さなかったけど、心の中では多分私は思っていました。この指導員さんは彼の唯一できるかもしれないことを見ていました。つまり、彼は部屋に入ると必ず蛍光灯などのスイッチを消したり点けたりしないと気がすまなかった。それを見た指導員さんは、ミキサーのスイッチを入れたり止めたりできるのではないかと思ったのではないかと思います。

「スイッチの操作しかできない」と捉えた私に対して、「操作することで仕事に参加している」と捉えている。何と優しく、何と可能性を広げる見方なのだろうかと思ったんです。私は在学中、彼をそのように見てあげなかった。深く反省しました。

ミツル君も同じでした。彼は教室に入ってくると、教室に入るのではなく教室を素通りして中庭に行って、中庭で砂を高く巻き上げ、ばらばらばらばらと砂をまくことしかやってくれなかった。雨の日などは教室で、紙を細かく切って同じようにばらばらばらばらして遊んでいました。彼も手を打てなかった子です。私が違うことをさせようとする、ズボンを脱いで拒否の表現をしました。これは必殺技です。私が何かさせようと思っても、パンツまで全部脱いでしまう。何かさせようということを置いといて、まずはズボン、パンツを穿いてとなりますから、彼にとっては必殺技だったのです。

ある時、砂を放り上げるミツル君の横に座って見たんです。ミツル君の視線と同じ高さになった時に、彼の気持ちが少し分かったよ

うな気がしました。ばらばら舞い上がるのをちょっとイメージしてください。こうやってぺたんと座って、乾いた砂をばらばらばらばらと撒くと、どうなるか。日が当たっていると、その砂が、上からだと思えないのですが、彼と同じ視線に立つとその砂がパーッと降りてくる時に輝くんです。いろいろな色が見える。

砂に色が付いている。赤も黄も青もある。緑だって紫だって、不思議だけど、落ちてくる速さも違って二度と同じ輝きが生まれません。私もまねして放り投げたけど、ミツル君ほどうまくできなかった。ミツル君、見飽きないね、こんな素敵なものを見ていたんだねと。1日中砂を巻き上げ砂遊びをしているだめな子だと思っていた私が、そうではない、彼は本当に素敵なものを見ていたんだということに気付きました。その時に、彼の良さが見えてきたんです。

でも、これはあくまで出発点で、そこから長い道のりがありますが、その子をどう見るか。その子の行動をだめな行動と見るか、共感的に、素敵なことをやっているんだねと見るかの違いは大きいと私は思っています。あくまでそれは出発点でした。ミツル君は私に向かって、今頃分かったのかよという顔をして、また、相変わらず砂を放り上げていましたが、私は彼とのつながりが見えたなと思っています。

人との関わりを持つことが苦手で話し言葉がない子どもの心の内をのぞくことは、とても難しい。私は子どもの表現、行動に寄り添って、表現を手掛かりにしなが想像力を働かせて、その願いや思いを分かろうと努力する必要があるだろうと思います。

これから介護等体験に行かれる時に、障害児学校に行かれる方とか、高齢者で認知症の方もいらっしゃる、この方は本当に何をやっているんだろう、何を楽しみに思っているんだろうと思われるかもしれない。けれど、

その行動や行為、表現の中にその方のいろいろな思いが詰まっているのではないか。想像力を豊かにしながら、その方の心の内にはせることによって、その人とつながっていけるのではないかと思います。想像力、1つのキーワードだと思います。

(5) 子どものなかの可能性や優しさをのびす

次にカイト君の話をして。1年生の時、家庭訪問に行ってお母さんといろいろ話をすると、こんなことをお母さんが言いました。「私たち夫婦の夢は、カイトと一緒にハワイのホノルルマラソンに親子で出場することなんです」と。

手を引っ張らなければ走れないし、一番遅いし、そんな夢実現するのかなと思いました。でも、私は「そうだよね。それはとても大事な夢だし、持ち続けようよ。僕たちも応援するから」とお話しした記憶があります。

今、彼は高等部2年になります。今年の年賀状に何が書いてあったかという、「先生、10キロ走り切りました。二十歳の誕生日の時にホノルルマラソンに出たい」。私は、行けそうだなと思いました。二十歳の時、もし一緒に行けるならば、私は走りませんが、応援したいと思っています。

このカイトが6年生を卒業した頃の話です。彼が卒業証書を受け取って着席しました。そうするとその後ろにいるコウヘイ君が話し掛けたんです。職員席で私は、まずいと思って身構えました。コウヘイは眼光鋭く、自分より体の大きい子をねじ伏せる暴れん坊です。6年生の後半から目立って、卒業式に何かしでかすかもしれないと職員が警戒していた子です。

ですから、コウヘイがカイトに何か話し掛けた時、私は身構えました。でも、次の瞬間、コウヘイが何をしたかという、カイトの卒

業証書を丸めて卒業証書の筒に入れてくれたのです。ただ、それだけです。まずいと思って身構えた私はとても恥じました。これまでの2人の関係を見ればそんなことは当たり前だったのですが、最近のコウヘイの行動に私の目が曇っていたということではないかと思います。

コウヘイのクラスとはずっと給食、音楽などいろいろな交流を行っていました。その時にいつも迎えに来ていた子がコウヘイだったのです。3年生、4年生の頃、毎回いつも「カイト行くぞ、音楽室行くぞ」と、迎えに来てくれていた子でした。クラス替えがあったけれども、いつもカイトと同じクラスにたまたまなったんです。林間学校の時も、同じ班になって一緒に生活して、カイトを手助けしてくれた子でした。

コウヘイは、父親から激しい暴力を受けていました。暴力は、言うことを聞かない時もあったけれども、ほとんどは父親がむしゃくしゃしていた時にありました。うさばらしということもあったようです。学校にも怒鳴り込んでくるようなお父さんでした。ほかの子もそのお父さんの存在を知っていますから、コウヘイが暴力を振るっても・・・、というようなお子さんだったんです。お母さんもその暴力にさらされ、怖がっていました。

コウヘイは、暴力を振るう父親を恐れ、嫌っていたのに、学校でも幅を利かす父の威光をバックに横暴さは増していました。こんな環境では勉強も進まない。6年の担任の先生は放課後彼を残して、2、3年生の算数の勉強を職員室の隣の部屋で教えていて、私も時々、おい、頑張れよと言って声を掛けていた子です。

こんなに分かんないよと勉強を投げ出す姿をいつも見ていましたが、分きたいのに分からない、そんな自分に彼はいらだっていました。暴力にさらされ、暴力でしか自分を表現できないという面を持っている。でも、も

う一方でカイトには優しいという面も持っていた。

私は卒業式の後、彼に「さっきはありがとうね」と言いつつ、彼はちょっと身構えていたので、彼の隙を突いてハグをしました。「やめろよ」とか何か言いながら、私の感謝の気持ちを受け入れてくれたようでした。やんちゃな俺が、目立つような優しさはできねえんだよという言葉みたいなものはあったのですが、子どもの中にはいろいろな面があって、本当に素敵な面も持っている。それをどれだけ評価してあげて、一緒にそれを伸ばせるかというのが教師の役目のはずです。

(6) 障害のある子をいじめる子どもたちもまた

コウイチ君の場合は、交流している学年が崩壊してしまったんです。授業中立ち歩くのが日常化して、私語が氾濫し、エスケープがザラ。誰もがいじめの対象になってもおかしくない状況で、昨日までいじめていた子が今日はいじめられている。コウイチ君は自閉症で、いけないことだと分かると彼はすぐ「それやっちゃいけないんだよ」と言っていました。そうすると、いじめの標的を探していたその学年の子たちは、飛んで火にいる夏の虫という感じで、コウイチにいじわるをするんです。コウイチに向かって虫とか動物を扱うように、木の切れ端で「おい、コウイチどうだどうだ」という感じでやっていました。それを目撃した私は、子どもたちをつかまえて「何やってるんだ」と注意したのですが、その子たちは「いや、僕はただ遊んでいただけなんです」と逃げる。彼らを注意すると「暴力だ。虐待だ。教育委員会に訴えてやる」などという状況がありました。

そんななかで、ある子がうちの教室に逃げ込んできたんです。それを追いかけてくる子がいて、その子たちをつかまえました。ボス

的存在のショウという子を、私がかんじがらめにして、「何でそんなことをするんだ」と注意すると、「サトウはずるいよ、なかよし学級に行っちゃいけないんだぞ」、「僕たちだってサトウさんみたいに教室から出たいんだよ。自由に過ごしたいと思ってるんだよ。教室で僕らもうんと我慢してるんだよ」と言って泣きました。荒れた学級のその行動はすさまじく、先生の心をずたずたにするけれども、実は荒れた子どもの心の底にある心情はとても寂しくて、「僕とまともに向き合ってよ、先生。僕の抱えた悩みや不安を受け止めてよ」という願いがいっぱいなのに、素直に出せなかったんだなということを感じた1件でした。

障害のある子とない子の交流の大切さが言われるけれども、実は難しい。難しいからこそ丁寧な取り組みが必要です。私のうまくできなかった反省の話です。彼らの伸びていく芽をどれだけ私たちが見つけられるかが、私たちに求められている課題なのだろうと思います。

おわりに

障害のあるなしにかかわらず、子どもたちはいろいろな思いだけではなく、そこには悲しみも抱えている。それを深く聴き取ることが心掛けていただきたいと思います。そのためには何をするか。先ほど言いましたが、想像力です。

私自身は、小さい頃勉強が分からなくて本当に苦労したとか、分からないことによって人に馬鹿にされたとか、いじめられたことはありませんでした。みなさんの多くも多分そうでしょう。それを経験する子たちは今、小学校や中学校にたくさんいて、そういう子たちの深い悲しみ、思いを経験のない私たちがどれだけ想像力を働かせて感じるかが大事なことだと思っています。

それからもう1つは、私自身は37年間も

教員を務めてきて失敗ばかりでした。しかし失敗を重ねる中でうまくいったこともいろいろありました。失敗を恐れずに自分がこうしたい、こうやれば子どもたちともつながれる、それから高齢の方ともつながれるというようなことを、周りの人たちとコミュニケーションをとりながら、失敗を恐れずに取り組んでいただきたいです。

最後に余計なことかもしれませんが、いろいろな職場に行った時に職場の仲間から信頼される最も大事なことは何か。力量があるとか、そういうことだけではないと思います。最も信頼されることは何かと言えば、1つは時間を守ることです。例えば、決められた時

間に集まる時に遅れることは絶対に避けるべきです。2つ目は、嘘をつかない。人に対して誠実であれ。私は、これらを37年間、大切にし、実行してきました。実習などに行かれる時に、この2つをうんと大事にしてください。

これからお付き合いされる障害のある人、高齢の方、障害のあるなしにかかわらず子どもたち、その人たちの思い、悲しみも含まれている思いをどれだけ想像力豊かに捉え、共感できるかが、何よりも大事だと私は思っています。頑張ってください。以上で終わります。

■品川文雄先生プロフィール

1972年 東京教育大学卒業。

37年間、埼玉県草加市で障害児学級を担当。

全国障害者問題研究会前全国委員長。

特定非営利活動法人発達保障研究センター理事長。

著書に「障害児学級で育つ子どもたち」（全障研出版）など多数。